

G・ベンの小説理論

——『Roman des Phänotyp』を中心として——

中 村 善 一

1. 小説理論の問題

小説 (Roman) というジャンルの総合的で明確な定義は、文学史にもまた現代の文芸学にも確立されていないようである。それは小説の形式が、現代においてもなお流動的であるということによるのであるが、さまざまな要素が自在に入り乱れてくる小説に形式的な標準を設定するのは、容易なことではない。結局小説の定義を困難にしているのは、次の二つの事実に基づいている¹⁾。一つは、小説を厳格に定義づけるということは、その結果において必然的に小説を規範的に拘束するという事実である。もう一つは、小説の形式および内容の多様性という性格である。この形式が一定していないこととその変遷の迅速さが理論の定着を不可能にする。それ故に小説を定義づけようとする試みは、正確なものを欲すれば欲するほど、漠然としたものになり、小説のすべての可能な形態を包括するだけのものになってしまう。しかも従来の小説理論は、素材による類型学的な論議であったり解釈論が支配的であった。

二十世紀に入って小説形式は、さまざまな方法でその輪郭を確かめようと努力するのであるが、現代の小説は、ひっくりかえって言えば、作者の認識可能な新しい意識状況によって性格づけられている²⁾。この意識状況は、閉鎖的な小説形式をもはや許し得ず、さまざまな要素を内包した複雑な構成をもつことになる。物語の進行にはいろいろの内容が挿入され、モンタージュ式に結びつけられ、人物の外部だけでなく内部までも精

密に描写されることになる。二十世紀の小説形態は、ほとんど制限のない自由を獲得している。それは物語の語り手の無拘束であり、登場人物や事件の解放であり、小説構成の奔放さであり、さまざまな表現手段、様式、言語形式の採用に到っている。そして人間と世界についての全体的で複雑な事実を、可能なかぎり直接的に叙述しようとする意図をもっている。この意図のためにもし必要となるならば、外的なリアリティーへの忠実さは放棄される³⁾。このようにして現代の小説は、叙述意図をどんどんつめてまれて、ますますむつかしいものになってくる。物語と叙述意図との間には弁証法的な緊張関係が成立することにもなる。こうして小説は、ある場合には娯楽のための寓話や、問題性をもっていないでただ人に知られていないたんなるお話しにもなれば、エッセー的なドキュメントにもなり、個性的な人物を描く代りに部分部分のモンタージュにもなる。

現代の小説の登場人物は、個人的な性格やタイプとしてではなく、その人間的な本質において把握される。人間はその行動において観察されるよりも、内的生活・意識生活・感情からみられる。そして主人公として取り扱われる人物は、偉大な人間もしくは悪者であるよりも、失敗者、敗北者、ドン・キホーテ的人物であることが多い。また現代小説の構成について言えば、組み立て方式が支配的であり、空間や時間はその機能を失い、さまざまな空間的・時間的領域が混在する、ある現実の叙述に奉仕する。現代の小説の作者は、自分の選んだテーマの可能なかぎり効果的な誇示と多くの局面の描写のために、慣習的な手法を捨て、自分のペルスペクティブから世界を見て、一つの世界を語るのではなく、一つの世界を形造ろうと努力する⁴⁾。

ゴットフリート・ベン (Gottfried Benn 1886—1956) の小説の場合はどうであろう。この小論は、1949年に発表された彼の小説『Roman des Phänotyp Landsberger Fragment, 1944』を中心にして、彼の小説理論を探究するのがねらいであるが、ここでは簡単に彼の作品の特徴につい

てふれておきたい。

ベンの文学は、時代の苛酷なニヒリズムの状況をはっきりと認識して、それに対して芸術的な形態創造の仕事を対置しようとする試みであるといえよう⁵⁾。それは「言葉」への信頼によって、無意味になった世界と虚無の生に対して、もう一つの新しい世界を形造ろうとする努力なのである。ベンの文章を引用すればこうである。「言葉は、それが記述する性格をいっさい考慮せずに純粹に觀念連合的モチーフとしてわたしの感覚を刺激します。(中略)わたしは、けっして人物たちを見ず、つねに自[我]だけを見、けっして出来ごとを見ず、つねに存在(それに在ること)だけを見ます。また、いかなる芸術も信仰も科学も神話も知りません。わたしが知っているのは、つねに意識性(Bewusstheit)だけです。永遠に無意味な、苦悩にせめがれた意識性だけです⁶⁾」この文章は、ベンの初期の散文作品『誕生日』についての彼の見解である。この初期の散文「レンネ連作」と呼ばれるものは、話の筋もなく、はっきりとした登場人物の設定もみられない散文の断片である。「持続的な心理をもはや自己の内部に担っていない一人の男⁷⁾」の意識状態を描いた小説なのである。彼の散文は、意識状態を徹底的に追いもとめ、可能な限りに明確にその意識内容を定着させようとする努力の結果なのである。「ところがこの意識内容たるや、本来もはや状態ではなく、潮流なのである。有史以前の原始時代と歴史時代と現代、記憶の断片、諸々の対象、生活体験や未体験が、不安定に、際限なく、ときによると暴力的に意識の裡にはいつてくる。⁸⁾」

作者も主人公も外界とは無関係に、孤立して存在しているのであって、もはや物語ることは不可能であり、ただ独白のみが、意識の内容についての独白のみが存在している。彼の使命は、「状況を認識せよ!⁹⁾」であり、この使命を果たすために、自分の考え、分析、全体的気分、頭に浮かんでくる章句などを觀念連合的に結びつけ、さらには自己の明確な認識と文学的形態とを混合させて叙述するのである。もはや人物の性格を描写するこ

とが目的なのではなく、抽象的で断片的な意識を羅列するのである。小説の内部の言葉は、何事をも説明しないし、説明しようともしない。それは外界の状況に対して超越的なものを対質しようとする試みである。硬質で抽象的な文章の緊張関係が、時間や空間とは無関係にそこにある。さまざまな表象の連続、リズム、過程がその散文の特徴であり、「さまざまなフォーム——それだけが重要なのであり、それが彼のモラルなのである¹⁰⁾」

一つの言葉、一つの宝——。暗号のなかから

認識された生が、きびしい意義が立現われる、

太陽は静止し、天球の音楽は沈黙する、

そして万有がその言葉へと凝結する¹¹⁾。

注 1) Vgl. Karl Migner: Theorie des modernen Romans, Stuttgart 1970, S. 13f.

2) Ebd., S. 8

3) Ebd., S. 38

4) Ebd., S. 40~41

5) 拙稿「ニヒリズムと創作」(「上智大学ドイツ文学論集」第八号, 1971, 所収) 113頁参照。

6) 河出書房新社『表現主義の小説』1971年, 343頁。

7) Gottfried Benn, Gesammelte Werke in vier Bänden, herausgegeben von Dieter Wellershoff. Wiesbaden, 1958—1961, Bd. IV, S. 36 (以下 G. W. と略す)

8) ライナー・ヴーテノー「二十世紀のドイツ散文」藤戸正二訳(手塚富雄・佐藤晃一編『現代ドイツ文学』所収) 有信堂昭和34年, 33頁。

9) G. W., II, S. 232

10) G. W., IV, S. 143

11) 平凡社『世界名詩集大成8』247頁(浅井真男氏訳)

2. 「現象的典型」の小説

『Roman des Phänotyp』(『現象的典型の小説』)という作品は、その副題にも示されているように、1944年にオーデル河の支流のヴェルデ川畔ランッベルグで書かれた作品である。ベンはこの作品を、この年の3月20日から6月20日までの3ヶ月の間に書き上げたが、ヒットラー政権からの執筆禁止¹⁾により、「貴族的亡命」を選び、1948年までは著作を発表できず、1949年に公刊したものである(Der Ptolemäer, Wiesbaden 1949 所収)。

この作品は、それぞれに標題をもった十九の段落²⁾から構成されている。しかもその各々の段落は、一個の小説の中で独立して存在している。それは「具体的な事実の面でも心理の面でも何らの連続性をもたない一連の組曲³⁾」である。

この小説でまず第一に問題になるのは、「現象的典型(Phänotyp)」という術語である。この術語についての説明をどうしてもベンの文章から確かめなければならない。この言葉は、デンマーク人ヨハンゼンによって提唱された遺伝学上の一概念であるが、ベンの説明によれば次の通りである。「現象的典型とは、時代の性格的な特徴を明瞭に表現にもたらし、その時代と一致していて、しかもその時代を代表するような各時代の個体(Individuum)である。この術語の反対概念は遺伝型(Genotyp)である。遺伝型というのは、その核心に種族のあらゆる可能性を蓄積していて、エンテレヒー⁴⁾に応じて時代の経過とともに発達した、もしくは発達しうるあらゆる現象的典型の潜在形態である」⁵⁾

現象的典型とは、以上の説明でも明らかなように、時代の特徴を具現している個体であると解釈し得る。あらゆる時代には、現象的典型があり、その根底には遺伝型があり、またそれ以外にも、現象的典型と平行して一時的なさまざまなタイプが顕現するが、これはその時代の内面的な代表的性格を担っていない泡沫的存在である。

ベンは、この現象的典型を小説の内部に定着させようとする。それは、

その時代（二十世紀中葉）の代表的な個体を確かめようとする「試みとなる。それ故にベンは自身ではっきりと、自分の思想は普遍的な永遠のものではなく、「局部的に制限され、フェノタイプ的な、せいぜい三十年間だけを代表する一世代の逼迫状態⁶⁾」であると明言している。芸術は完結した状態のものであり、自分自身だけを語り、他の観念を含まず、それだけで完成しているものであるというのが彼の信念である。いわゆる西欧の没落により、ヨーロッパ思想の基本原則が危機にさらされていることを確認して、「確実なもの絶対的なもの」の喪失の中で、その時代の真に代表的な性格を確認するために、表現を欲し表現だけを欲する。

現象的典型とは、ほんらい生物学的・遺伝学的な領域における言葉であり、遺伝子の作用や周囲の影響によって外部に現われ出た性質を指すのだが、ここでは精神史上の問題⁷⁾となっている。現象的典型は、「遺伝型の現実的な一断面⁸⁾」であり、種族の内部に蓄積されているあらゆる可能性（遺伝型）が時に応じて現実化されたものである。そしてこの現象的典型は、核心的なものと周辺、継続と新しいものの誕生というような相対するものの緊張関係から生まれ出てくる。現象的典型を小説として表現しようとする試みは、具体的に言えば、人間はどこで変化するのか、いつ変化するのか、どのような根源からそしてどのような方法で変化するのか⁹⁾、という疑問に対してできるだけ直接的に叙述しようとする試みである。人間の肉体は短い時間で変化発達するものではないが、精神は新しい表現や爆発や脱皮を起こし得る。変異の能力と可変性は人間精神の内部に活動力を温存している。波と海岸とは一体となって大陸の輪郭を形造っている。波の浸蝕のすべてが永久にその痕跡を残す訳ではないが、その一部は新しい輪郭を形成する。人間の精神も同様にさまざまな実験を繰り返し、人間精神に新しい輪郭を形成する。その変化を受ける変化帯は、不安定で、不都合な状態を強いられるが、動揺の内部から、新しい現象的典型が生まれるのである¹⁰⁾。

以上のような基本的な考え方から、現象的典型の小説は、従来の文学作品とは異質の何か根源的に新しいものを敘述する。それは伝統的な世界像の内部に生きている人間とはもはや遠く隔たってしまった世界である。表現は、ほんとうの意味の「内的変化¹¹⁾」を達成することに向けられ、道德的なもの、政治、愛などという人間存在上の術語は現象的典型とは無関係になってしまう。たとえば「愛は、巧みに愛そのものを存在するかのように見せかけ、すでになくなってしまった個人のために代償物を作り出す¹²⁾」のである。ここでは実存そのものが、内的変化の表現として、ある個人の代りをするのである。この実存の概念は、因果的な把握を拒否し、本質的な把握を要求する。

ところで小説作品の内部における実存の概念はどのように作用するのか。ベンによれば、それは自我の主眼を、心理学的・決疑論的¹³⁾なものから、独自のなものへ、闇の内部へ、閉鎖的なもの核的なものへと導くのであり、個体をその周辺に低下させ、個体に重みと意義と徹底性を付け加えるのである¹⁴⁾。

ここでベンの言う周辺というのは、先にのべた波と海岸が形造るあの大陸の輪郭の領域である。つねにはっきりと一定の方向へ動いて行くとはかぎらないが、実験的性格を持っていてさまざまな形態を生み出し、新しい現象的典型を生み出す可能性をはらんでいる「変化帯」を指している。すでにふれたように実存は独立的な本質的把握を要求するから、この実存の概念が作品で徹底的に追求されればされるほど、社会的な現実の世界とは疎遠になってしまう。すなわち実存的である現象的典型の小説は、社会的世界に関係しようとしないうし、その目的に奉仕することもできない。社会的世界の側からみれば、現象的典型は、存在意義をもたないことになる。社会 (Gesellschaft) の中で生きる能力を喪失してしまった人間が、もう一つのより包括的な社会 (Gemeinschaft) を求めてその中に没入するのである。言い換えれば、ニヒリズムという現実の世界と、回想と実存の力

によって建てられる超越的なもう一つの世界との関係である。

人間は、行為するのか、瞑想するのかと問われたら、ベンは「表現を行なうということ。そうだ表現をこそ欲し、表現だけを欲する¹⁵⁾」と答える。こうしてベンは、人間を、言葉という形式のなかで生きている精神的本質として理解し、描写のためではなく、自己を更新するために、現象的典型の小説を構想するのである。そしてこの小説は、「体験され、精神的に検査された一つの形式¹⁶⁾」の内部で完成される。

このような小説を読むとき、読者である我々は、表現の総和が現象的典型を形成しているのではないことを知って、個々の具体的な内容は度外視せざるを得ない。題材として言葉に定着されているものの内部には、現実の源初的な生成が存在しているのであるから、我々はこれを、筋の連続ではなく、描写の関連性として、形式のなかに発見するように努めなければならない¹⁷⁾。形式と現象的典型の緊張関係が見つめられなければならない。

注 1) この間の事情については、彼の自伝的著作『Doppelleben』に詳しい
Vgl. G. W., IV, S. 91~106

2) この段落の各々の標題は次の如くである。Der Stundengott. Gestutzt auf Pascal. Ambivalenz. Statische Metaphysik. Die Vereinigung. Blicke. Dialektik. Bedenken gegen Nietzsche. Völliger Gegensatz zu Schifferkreisen. Summarisches Überblicken. Geographische Details. Der Stadtpark. Die Geschichte. Libellen. Pilger, Bettler, Affenscharen. Bordeaux. Blöcke. Zusammenfassung. Studien zur Zeitgeschichte des Phänotyp.

3) G. W., IV, S. 132

4) 独和辞典によれば、生体に仮定された合目的生命力、完成作用である。語源はギリシア語の *entelecheia* で「完全となる」の意。もともと単なる可能性として与えられたものを実現あるいは実行にもたらせるものをいう。

5) G. W., IV, S. 143f.

6) Ebd., S. 166

7) René Wellek によれば, 「精神史はドイツでは一般にもっと特殊な意味にうけとられている。それは各時代がそれ特有の『時代精神』をもち, そして『一時代の精神を, 一時代をさまざまに客体化したものによって——その時代の宗教からその時代の衣裳にいたるまでの——再構成すること』を目指している, と仮定しているのである。『われわれは対象の背後に総体をもとめ, 一切の事実をこの時代の精神によって説明する』太田三郎訳「文学の理論」, 筑摩書房昭和42年, 119頁 (René Wellek and Austin Warren: Theorie of Literature, Harcourt Brace and Co. Inc. 1948)

8) G. W., II, S. 152

9) G. W., IV, S. 144

10) Vgl. Ebd., S. 170~172

11) G. W., II, S. 154

12) Ebd., S. 153

決疑論 (Kasuistik) とは, 「社会的慣行や法律や教会・聖典の律法などに照して, 良心の問題や道德問題を解決しようとする学問」 (相良守峯編「大独和辞典」博友社版)

14) Vgl. G. W., II, S. 154

15) Ebd., S. 162

16) Ebd., S. 153

17) Vgl. Bodo Bleinagel: Absolute Prosa, Ihre Konzeption und Realisierung bei Gottfried Benn, Bonn 1969, S. 18

3. ベンの小説理論

a ベンの小説観

ゴットフリート・ベンの作品『Roman des Phänotyp』は, 小説作品であると同時に彼の小説理論の実際である。ここでは, この作品にしたがって彼の小説理論を概観してみたい。

この作品は, ベン自身も言っているように, ひどく難解である。その理由は, 「具体的な事実の面でも心理の面でも何らの連続性をもたない一連の組曲¹⁾」にすぎない, それぞれに独立した断片 (Fragment) の集積が

小説と呼ばれているからである。この手法は、言いかえれば、「言葉と文章の組み立て自体が芸術²⁾」であるという考え方に由来している。ベンは、このような可能性に芸術それ自体をみて、「絶対散文」ということを提唱する。それはもちろん、時間をも空間をも超越していて、心理描写の全然ない小説作品である。この作品の全体的構成について、次のように解説されている。「この小説は——私は次の表現に注意を促したいのだが——オレンジ³⁾の形に構成されている。一個のオレンジは、たくさんの扇形の部分から出来上がっていて、その個々の部分、各小片は、すべて等しく、すべてが並び合って、等価値である。一つの小片があるいは若干多数の種子をもっていて、他の小片はそれより少いということはあるだろうが、それらの小片はみな、外に向かおうとしているのではなく、空間に向っているのではない。それらはみな中心へ向っている。我々がオレンジの小片を離し取る際に果物から取り除くあの白い強靱な繊維根の方へ向っているのである。この強靱な繊維根こそが、いわば現象的の典型であり、実存的なものなのである。これほど核心的なものはなく、これだけが核心的なものである。各部分のこれ以上の結合は存在しないのである³⁾」この文章の、強靱な繊維根にあたるのが、小説の作者である実存的な人間である。作者が核心的に中心に位置していて、思考し回想する。その思想と内的な観察が、時に応じて創造行為に結晶する。それらの結果は、さまざまの断片として、オレンジの小片のように、一つの小説作品の数々の段落を形成するのである。『Roman des Phänotyp』の十九の段落はこのようにして出来上がったものである。従ってその各々の段落は、その核心の位置で結合してはいるが、あくまでも「時の神 (Stunden-Gott)」と「刻々の自我 (Stunden-Ich)」によって生み出された、独立した断片であり、各部分は一切の脈絡をもっていないのである。その内容は、現実の世界でもあれば、また空想や抽象の働きによる現実を超えた世界でもある。次にこの小説の創作意図と成立の状況そして形態を概観してみたい。

b 創作意図

詩人ベンを表現の仕事に向わせるのは、なんといってもヨーロッパの文化圏のなまなましい傷跡を癒そうとする意欲である。確実なものや絶対的なものが失われてしまったニヒリズムの一般的風潮の最中であって、広い精神空間のなかで超越的なものを得ようとする闘いである。彼の思想内容そのものは別としても、徹底的なニヒリズムの意識から、歴史的進展や理性的成果を信用しようとせず、ただ形式意志、すなわち言葉による新しい世界の構築にすべてを注ぎ込もうとする詩人の態度が問題なのである。彼の作品を決定するのは、その全般的な緊張感であり、形式的完成に賭ける強烈な精神である。作品を成立させる原動力は、言葉と形式への執着と絶対的な信頼である。

ベンの創作の方法は、普通の常識から判断すれば、ずいぶん奇妙な方法である。その方法の一つはこうである。実際的な言語慣用の手段によって、ある概念に対して全く異質の新しい概念内容をおつけるのである。

たとえば「自然の方法」と「歴史」という概念に対して、従来の概念内容とは正反対と思われる内容を規定する。現象的典型として現われ出た一時的なイメージを、その時代の代表的なものと理解して、その異質の内容を対質させるのである。人は結局自分でも笑い出さざるを得ないような呆れたものを創り出す必要があると彼は考えている⁴⁾。既製の世界にも既製の概念にも、この新しい異質の内容を対質することによって、一切をみずからでふたたび止揚しようとするのである。この過程を経ることによってはじめて一切のものが飛翔するのである。古い概念内容に対して、各時代の現象的典型を時に従って対応させてみることによって、新しい言葉の働きが生まれ、新しい観察方法が完成する。

「自然の方法」というのは、ベンによれば（ベンが彼の時代の現象的典型として理解したところに従えば）、我々が自然なものと名づけるものとは反対のものであり、我々が自然なものとみなすもの以外のものなのであ

る⁵⁾。すなわち生産的で精神的な自然の方法とは、「誇張、脱線、飛躍、濃縮であり、きわめて小さい空間への測り知れない緊張の想像もつかないほどの集中であり、おじゃんにしてしまうこと、放置、忘却⁶⁾」なのである。また次に *Die Geschichte* と名づけられた段落によれば、歴史の働きは、偉大な人間達の没落と神々の死の中に示されているという。それ故に今日の現象的典型にとって歴史とは、比較し得ないものの並存であり、崩壊、非連続、無意味なものなのである⁷⁾。人は、歴史の概念に対して、その時代に密着した意味を付与することによって自由な展望が開け、歴史のリズムの拘束を受けることがなくなるのである。

「自然の方法」や「歴史」に対しての以上のようなベンの意味付与は、伝統的な概念に異質の本質を自由に迎え入れることによって、否定的な働きを誘発し、新しいペルスペクティブから新しい表現を行なおうとする試みに他ならない。このような場合の作者の位置は、いつも新しい実験の中心となり、その時々「一々のペルスペクティブ⁸⁾」が獲得されなければならない。それは言い換えれば、「刻々の自我」の働きによるものである。それではその自我の立脚点はどこにあるのかと問われるが、「そんなものは全然ない⁹⁾」のである。そこにあるのは「精神の冒険としての擦過 (Vorüberstreichen)」である。「それは無から現われ出て、すなわち我々が無から逃げ去り、また無のなかに解消することであるが、それは我々を越えて連なっているのである¹⁰⁾。」この擦過（ふれて過ぎること）という運動のなかにこそ、非連続的な実存の方法が暗示されている。一つのペルスペクティブが開けまた消え去って行く、無から現われふたたび無へと解消するアーチ状の運動に、ベンの芸術の存在方法が説明されている。それはある一定の発展過程とは無縁の出来事であり、「静力学的」なのである。一個の作品が完成するのは、ある閉ざされた空間においてのみであり、ダイナミックな運動は芸術以外の領域に属するものであるとベンは確信している。

さらにこの作品の詩的対象として、二十世紀の現象的典型を特徴づけているあらゆる内容が入り込んでくる。そこでは外的なリアリティーの度合とは関係なしに、個々の意識のまわりに形成されるさまざまな形象が言葉に定着させられて行く。「直接的体験は後退する。さまざまな形象が、その汲み尽し得ぬ守られた夢が、燃え上がる¹¹⁾。」作者の意識の内部に燃え上がるもろもろのイメージが、言葉になって形式の内部にはめ込まれる。此岸のニヒリズムと彼岸への回想の緊張関係の合力のなかに、一時的な実存が確認され、美と悲哀につつまれた「夢」が準備されて一つの世界が生じる。「全般的に展望し、通読して行くだけで、時々軽い陶醉が生じる。ヴィーナスたち、アリアドネたち、ガラテアたちが褥から離れて拱廊の下に立ち上がる。果物を集め、彼女らの悲しみにヴェールをかぶせ、すみれを落して、一つの夢を投げ送る¹²⁾」このようなさまざまな世界が現われる。世界は、いろいろの言いまわしや、無意味な連関や、鋭敏な意識の働きによって再構成される。言葉とモチーフを繰り返して按配することにより活気のあるもう一つの世界を造り上げる。時々さまざまな思いつきがはめこまれてそれがさまざまに展開される。

この世界は、人間の脳髓の内部で陶醉的に成就した一時的な映像である。しかし今やそれは体験されたのであり、作品として完了する。それは意識のまわりに構築され、時間と空間の埒外に想像力によって建てられた、言葉それ自体のための絶対的な散文の所産である。

c 作品の形態

『Roman des Phänotyp』という小説は、十九の段落の総体として成り立っていることはすでに述べたが、この十九の段落の最後から二番目の *Zusammenfassung* と名づけられた箇所ではじめて、この小説の主人公が、明確な人間的形態として登場する。そこにはこう述べられている。「以上に述べてきたことは、1944年3月20日から1944年6月20日までの四分の一年間の現象的典型の表現であり、回想であり、行為なのである。そ

れは彼の挙動を敘述するのに十分な時間の広がりである。彼は東部の兵舎に住んでいた。彼は軍の糧秣を得ていた。週に二個の軍用ペン、充分なバター、一日に二回のスープもしくはキャベツ料理の鉢盛りである。彼はそれで貯えを用意していた。彼の部屋は練兵場に面していて、そこでは国民が彼らの理念を追求していた¹³⁾。」これが軍医として従軍していた作者ペンであり、この小説の主人公の状態の描写である。この頃の状況については、彼の自伝的著作である『Doppelleben』の中の「第二ブロック第六六号室」という文章に詳しく語られている。このように軍の兵舎のなかで精神的に孤立していた小説主人公が、一つの連続した物語としての話の筋のなかで表現されることは不可能であった。主人公の形態は、ここでは四分の一年間の現象的典型の表現として、周囲や外部のリアリティーとは無関係に、独白の形で提出される。そこでは「状況を認識せよ！¹⁴⁾」という自分で設定した課題に従って、頭脳の内部に浮かび上がってくるさまざまな章句を観念連合的に結びつけるという方法のみが有効であった。

実存的な人間の存在と思考とが、断片的にまたエッセー的構想で、意識内容の総体として言葉に定着させられているのである。主人公は小説の世界のなかで、中心部に静止して存在している。彼は思考し、空想し、回想して、意識と形象の緊張関係を創造するが、空間的な運動はしないし、ほとんど行為しない。「めったに運動することのない主人公、彼の諸行為は遠近法であり、思考過程が彼の本領なのである¹⁵⁾。」

この主人公は、運動したり行為したりはしない。運動や行為に代わる彼の方法の一つは、「見ること」である。全景を一時に見渡すのではなく、時々のペルスペクティブによって、細目を見るのである。それはペンの言う遠近法主義 (Perspektivismus) であり、静力学の方法の別名である。この方法は、確かに時代の現象的典型の性格を抽出するのに有効であるが、「刻々の自我」による「一々のペルスペクティブ」から抽出された細目は、構成されたり連結させられることはない。統一的な連続を作らない

のである。それは対象に急迫はするが、一時的であり、事物の推移はこま切れにされてしまう。「見ることの発作¹⁶⁾」が集積されるだけである。現象的典型は、そこに抽出した一つ一つの細かい事実を、寄せ集めて一つの包括的な網を編むことはない。現象的典型自身が網なのであるから¹⁷⁾。ここにもまた、芸術というのは、閉ざされた空間の内部でのみ完成するものであるという考えが、芸術は静力学的なものであるというベンの基本的な考え方が投影している。

以上のように、この小説は、最初に小説全体の形式的構想があって、そこから結果的に主人公像が制限つきで生まれてくるのであって、決して初めに主人公の形姿がありそれを中心に物語が展開するというのではないのである。

つぎにこの小説の筋の展開であるが、これは「最初の言葉」が、主たる言葉・中心的テーマへと移行する過程そのものなのである。

「最初の言葉が、シチュエーションを、名詞の結合を、全体の雰囲気創造するのである。その続きは前の文章の文末から生じるのである。話の筋は、思考的なアンチテーゼのなかにある。¹⁸⁾」このような経過をへて完成した小説をベンは、「すわりの良い小説 (Ein Roman im Sitzen)」と呼んでいる。最初の言葉は、精神的な実存として創造の端緒となり、それに対して反対命題が提起される。ここに精神的な討議が行なわれ（すなわち筋の展開）、最初の言葉から中心的テーマへと到る一つの段落が構成されるのである。話の筋とは、ベンにとってあくまでも精神的なものの内部で演じられる出来事であり、たんなるお話の展開ではない。しかしこの筋の展開は、多くの場合意味のない循環運動やたいくつな回帰に陥る。生産的運動は、段落の終りに到っても、必ずその運動が終結する訳ではない。反命題にはまたその反命題が提起されるのである。各々の文章は、対比的なものとの緊張を担いながら自身で存在し、ただ形式的にのみ関連している。「すべてはどこから始まるということもないし、どの地点で終る

という訳のものでもない¹⁹⁾」

個々の文章、個々の段落は、因果関係的なかわり合いなしに、各々がそれ自身で完成的に表現されている。『Roman des Phänotyp』の全体は、このような自立的な文章と段落の総体なのである。

注 1) 「2, 現象的典型の小説」の注3) 参照。

2) G. W., IV, S. 132

3) Ebd., S. 132f.

4) Vgl. Ebd., S. 165

5) Vgl. G. W., II, S. 168

6) Ebd.

7) Vgl. B. Bleinagel. a. a. O. S. 21 なおベンの歴史観については、拙稿「G・ベンの歴史概念」(「現代科学論叢」第五集1971年所収) S. 86—93参照。

8) G. W., II, S. 158

9) Ebd., S. 185

10) Ebd.

11) Ebd., S. 172

12) Ebd., S. 171f.

13) Ebd., S. 188

14) 「1. 小説理論の問題」の注9) 参照。

15) G. W., II, S. 182

16) Ebd., S. 165

17) Vgl. B. Bleinagel. a. a. O. S. 35

18) G. W., II, S. 182

19) Ebd., S. 158

まとめ

『Roman des Phänotyp』という作品は、ある部分は詩的な虚構の体裁を持ち、他の所では純粹に知性的なエッセーの形態を保っている。折衷的解決とみなされざるを得ない。それは全体的にみれば、統一を欠いてい

る訳であるが、「現象的典型」を小説として定着させようとする作者の新しい試みのやむを得ざる結果でもあるだろう。小説をエッセー的な次元にまで拡大した大胆な形式的解放の試みである。作者の意識状況に性格づけられ、筋の展開にはさまざまな要素が詰め込まれて、登場人物も小説構成も独特の形態をもっている。リアリティーへの忠実さは放棄され、独白体を採用して、小説の内容はきわめて難解になっている。

それらはみな、作者が自分のペルスペクティブから、新しい世界を形造ろうとする努力の所産である。強度な芸術意志の結果としての、言葉と文章とを作品においてそれ自体のために定着させようとする、絶対散文と呼ばれるものの結実に、彼の面目を見ることができるのである。『Roman des Phänotyp』において、ゴットフリート・ベンは、「現象的典型」によって、真実を追求しようとしたのである。